

基礎研究を深化

ラスカー賞受賞 森教授会見

ノーベル賞の登竜門とされる米国の医学賞「ラスカー賞」の受賞が決まった京都大の森和俊教授(56)＝倉敷市出身＝が9日、京都市左京区の同大で会見。「25年間続けてきた地道な研究

が認められ、とても光栄」と喜びを語った。森教授は、細胞内小器官・小胞体に関する研究が受賞理由になった意義について「基礎研究の重要性が広く認識されれば幸い」。同



会見でラスカー賞受賞の喜びを語る森教授

じ分野でしのぎを削り、共同受賞となった米国の研究者ピーター・ウォルター氏については「今は認め合い、ええハグする仲」とライバルの存在に感謝した。研究は、がん細胞の増殖抑制などさまざまな病気の治療につながる可能性に言

及。自らは基礎研究を深化させつつ、将来的には創薬へ発展させたい考えを示した。受賞者の多くがノーベル賞を受けていることには「(自分が)与えられればうれしいが、どうなるかは分からない」とした。

研究者を志したきっかけの一つに「小さいころ読んでいた山陽新聞の科学記事」を挙げ、「倉敷の両親も受賞を喜んでくれていた」と表情を和らげた。

森教授は青陵高から京大、同大大学院へ進み、1989年、米テキサス大で小胞体研究を始めた。

(小野暁)